

F R E E

s u p e r s c h o o l ' s

f r e e p a p e r

O O 1

editroom

+

superschool

+

gallery

***g*³**



g³/

editroom

+

superschool

+

gallery

私たちは、次代の価値を創造する事をミッションとする、新しいアートプロジェクトルームです。

編集とキュレーション、そしてギャラリーの新しいモデルを探求し、実践します。

私たちは、エクスペリメント、そしてエクスペリエンスへの意志に満ちた才能を発掘し、世界に向け発信します。

g³/ (Triple g) is a new art project room established with the aim to create the value of coming generation.

We will explore innovative models of editorial and curatorial practice, as well as art management.

g³/ aims to discover and foster talents full of eagerness to experiment and challenge new experiences.

スーパースクールの フリーペーパーです。

旧錬成中学校を改修して作られたアートスペース、3331 Arts Chiyoda。
スーパースクールは、その3331に入居している
編集者・後藤繁雄が主宰する編集学校です。

新ベーシック編集術クラスは「都市と編集」をテーマとし、
3331がある外神田／秋葉原の編集を試みました。

『この街にはどんな歴史があるのか？』
『アキバ系ファッションのオタクは本当にまだいるのか？』
『どんな魅力があり、どんな人たちが集まっているのか？』
『外神田／秋葉原はこれからどうなっていくのか？』

そんなことを考えながら、街を歩き回り、
調査結果をフリーペーパーとして発行しました。
そして本書は、そのフリーペーパーを電子書籍化したものです。

他にも、外神田／秋葉原の魅力を伝えるために、
新しいガイドマップを作ることにしました。

そこで開発したのが「都市と編集」アプリ。
これは投稿型街歩きマップで、自分でコースを設定し、
それにあつた複数の場所をマッピングすることができます。
閲覧者は興味ある地域・コースを選び、
ガイドマップや読み物として利用することも可能です。

フリーペーパーや電子書籍、「都市と編集」アプリを利用しながら、私たちはこ
れからも秋葉原／外神田の編集に挑戦していきます。

editroom TOI (Tokyo Open Intellectuals)



g3/をスタートさせる時に、今まで自分がやってきたことを踏まえて、「編集とギャラリー」、「仕事場と開発室」が合体したような「ニューモデル」の実践をしてみたいと強く思った。僕の最大のテーマは「新しい価値の創出」であって、そのための方法として「編集」や「キュレーション」という戦略的方法がある。だからアウトプットは、ある時は文章だったり雑誌や本だし、広告やプロダクト、コンテンポラリーアートや写真の展覧会などになる。自分の好きとか嫌いで仕事をつくるのではなく、あるヴィジョンや「時代の無意識」をもとに方向ダイレクションを定め、仕事をつくっていく。ありがたいことにそうやってずっと生きてきた。

エディットルームとは、具体的に「編集室」「編集部」だ。今も書籍や企画誌をやっているが、この秋からは、広告をテーマにした新たな季刊誌が始まる予定だし、電子出版を射程にしたプロジェクトもスタートさせようとしている。出版不況と言われ、昨年などは170誌近くの雑誌が廃刊となった。想像を越えた出版界の「大転換期」と言ってよい。しかし、だからと言って雑誌や編集がなくなるわけではない。昨日の夜も『ヴォーグ』編集長のアナ・ウィンターの「伝記」を読んだが、「パブリーでセブな編集」がこの地球上から消えたりはしないと思った。もちろんアナを絶賛するつもりはないが、「魅力をいかに創出させるか」と

いうことにおいて、アナはすごい女性だと思う。これから「編集」は、もっともっとむき出しのバトルフィールドになって行かろう。第2、第3のアナが生まれる可能性だってある。今や雑誌は広告が入らないと嘆いている。広告はネットにくわれて行く。確かにもう昔のように戻ることなんてないに違いない。しかし、イノベティブであれば、新しいものをいかに発明すれば良いか。それに向かえば良いだけだ。時代は変わっていくのだから、編集だってどんどん変わっていけば良いのだ。

エディットルームとしてのg3/でやりたいことは、出版やネットだが、もう一つ重要なのは、才能をエディットするためのイベントだ。スーパースクールは編集教室だが、それとは別にトークイベントなどのプログラム開発に力を入れたい。

g3/galleryの展覧会に合わせてTOI(Tokyo Open Intellectuals)というリレー形式のトークイベントをスタートさせた。このあいだは、建築×写真をテーマに五十嵐太郎×藤村龍至×小山泰介×緒方範人らをやった。価値を生み出すのは、新しい人間の才能だ。それをいかにエディットするか。そのことが僕がいつも「プログラム開発」と呼んでいるものである。

gallery



おかげさまで写真とグラフィックを専門とする G/P gallery は、開廊 2 周年を迎えることができた。そして、姉妹ギャラリーである g3/gallery がいよいよ本格始動している。この 2 年を振り返って実感するのは、日本にはほとんどいないと言われる「現代写真コレクター」をいかに生み出すかという挑戦であり、同時に日本の優れたアーティストと作品を海外でプロモーションすることだった。G/P は、所属作家の若手を G/P フロントラインとしてラインナップ化し、プロモーションに力を入れ、Paris PHOTO など海外のアートフェアへの積極的出展によって、コレクターをつくってきた。また、THE EXPOSED やトーキョーポートフォリオレビューなどにも力を入れ、どのギャラリーよりも積極的に「コンテンポラリーアートとしての写真」の振興活動をやった自負がある。

では、新たにスタートさせた g3/gallery とはどんなミッションを持って始動したのか？ g3/gallery は、インスタレーションとペインティングというメディアのアーティストをセールス&プロモーションすることを目的とする。若手作家の育成に力を入れ、2 年間は所属作家を 5 人のアーティストだけにしぼり、場合によっては年に 2 度の個展さえ計画。単に売ればよいというのではなく、作家の力や評価のコンテクストをしっかりと作ってゆくことに力を入れたいと考えている。



河野愛 / タイトル未定 / 2010 / チョーク、墨版 / Courtesy of g3 / gallery

5 人のアーティストとは、梶岡俊幸(日本画)、ヒョンギョン(ペインティング+インスタレーション)、河野愛(インスタレーション)、三井美幸(インスタレーション)、小笹彰子(ペインティング)。5 月の開廊はヒョンギョンであったが、彼女は早くも 9 月に最新作ばかりを集めた個展が予定されている。また、8 月 6 日からは、昨年 INAX gallery で個展でも注目を集めた河野愛の新作展『spin a tale/memorium』を開催する。

schedule

7.29-8.1

John Warwicker 個展

(THE TOKYO ART BOOK FAIR と連動したスペシャル展示)

8.6-9.19

河野愛個展『spin a tale / memorium』

9.28-11.7

ヒョンギョン個展 II 「ギラギラ」

11 月

赤石隆明個展

superschool

スーパースクールを僕が始めたのは、1996年のことだからもう14年もやってきたことになる。始めたのは、青山ブックセンターの本店がオープンすることもあって、「東京を編集するワークショップ」ができないかというのがきっかけだった。本来僕は編集者／クリエイティブディレクターだし、アカデミックな専門領域から知識や技術を「教授する」なんてタイプではないから、「教える」「学ぶ」ということが何かを考えるとところから始めなくてはならなかった。だから、逆によかったんだと今になって思う。スーパースクールの「歴史」は、編集の可能性を開発することのプロセスであったと言ってよいからだ。そしてそれは終わりがなくとも知った。そのプロセスは『ニューテキスト』（リトルモア）と『僕たちは編集しながら生きている』（マーブルトロン）という2冊の本となり、ありがたいことに多くの人に読まれた。気がついてみると、スーパースクールという編集学校は、学校であると同時に、編集を考え・編集を開発する場になっていった。これは、編集の仕事が続いている僕にとっても、きわめて重要な作業となった。なぜなら、従来、「出版」のノウハウと思われていたものを、「うまく生きること」「生活を編集すること」「自分の仕事を編集すること」へと拡張させることを意味したし、時代自体もPCのパーソナル化やネット世界の出現によって、「編集というノウハウ」は、誰もが求めるものとなっていったからである。

だから、スーパースクールを振り返ると、その「時期」において、考えたり、開発したりするベクトルが随分違ってくる。僕が文芸誌をやっていた時は、「価値ある文章とは何か」にシフトしたし、坂本龍一さんたちとcodeという自然環境に負荷をかけないグッズや、想像力豊かに生きるクリエイティブを考えていた時には、エコにシフトした。

永くやってきたが、今年から3331 Arts Chiyodaに引っ越した。今までは、青山ブックセンター本店の読売カルチャーサロンに属していたけれど、思い切って独立させることにしたのだ。それは、今後、永きにわたって本気で「編集の可能性」を試してみたいし、開発してみたいというインディペンデントな決意からくるものだ。

編集は、もちろん出版物を中心としたノウハウだ。文字とビジュアルを扱い、どのような「価値」を生成させることができるのか。恋を伝える手紙も、社会運動のためのフリーペーパーも、PR誌も、それらの「成功」は、そこにかかっている。そして、出版物が紙から電子化へ向かう時、「新たなベーシック」が定められる必要がある。このg3/でのスーパースクールの2つある講座の一つを「新ベーシック」としたのは、その狙いがある。そしてもう一つが「戦略的編集人間」を生み出すための野心的なプログラムだ。「戦略的編集術」のコースを選んだ人は、「これが編集教室？」と戸惑うかもしれない。なぜなら、それは生徒を巻き込んだ様々なプロジェクト開発の場だからだ。P・ドラッカーは「目標は実行に移さなければ目標ではない。夢にすぎない」と言ったが、ただ「面白いものがない」なんて言っていてダメな時代だ。スーパースクールは、東京で一番面白い「価値」を創造するプロジェクト室でなくてはならないとはっきりと思っている。

戦略的編集術コース

新ベーシック編集コース

ただいま

第二期生募集中！

info@g3tokyo.jp

01 「都市と編集」アプリを開発中 text by 森田龍磨

「編集」と聞いてあなたは何をイメージするだろうか？多くの人は、本や雑誌など紙媒体を作っていくことが編集だと思うだろう。しかし、時代によって編集の意味も大きく変わってきた。その変化として、Web によって都市を編集することも可能になった。逆に、都市をフィールドワークすることで、都市そのものから新たな編集ノウハウが発見される可能性もあるのである。

3331 Arts Chiyoda は、旧練成中学校を改修したアートスペースだ。スーパースクールは、その 3331 に入居している後藤繁雄（編集者）が主宰する編集学校。今回、新ベーシック編集術コースでは、都市編集のノウハウ開発のため、外神田を舞台に新たなタウンマネージメントを試みる。都市を編集するにあたり、その方法論を知るために、京都造形芸術大学非常勤講師の水野大二郎氏に話を伺った。水野氏は「ペーパーバックガールズ」などの活動を通して、ファッションと都市の関係性を考察している人物だ。www.daijirom.com 水野氏によれば、いくつかの仮説を立て、それを検証するためにフィールドワークを

重ねること、そして街の現状をよく理解することが重要だという。そこで我々は、継続的に外神田／秋葉原を調査しながらフリーペーパーを発行することにした。果たしてアキバは未だにオタクの聖地なのか？ 外神田の歴史的地理位置づけや魅力とは何なのか？ そんなことを考えながら、街を歩き回った。それと同時に、外神田／秋葉原の魅力を伝えるために、新しいガイドマップを作ることにした。そこで開発したのが「都市と編集」アプリである。これは表示された google マップの中から好きな場所を選んで、紹介文や写真を載せることができる投稿型街歩きマップだ。自分でコースを設定し、それにあった複数の場所をマッピングすることもできる。閲覧者は興味ある地域・コースを選び、ガイドマップや読み物として利用することが可能だ。（7月末日に公開予定）

このようにして、我々は都市を編集していく。そしてこれだけに止まらず、外神田／秋葉原という街にある 3331 を、「場所」として編集することにも挑戦するつもりだ。



02 外神田と秋葉原 街のプロフィール

text by 野口良太

外神田には、不思議な魅力がある。同じ街の中にオタク街とパワースポットという、全く結びつかないものが存在している。この街の不思議なオーラは、それらの化学反応から生まれているのだと思う。

江戸府内より見て神田川の外側を「外神田」と称していたことから、1964年(昭和39年)の住居表示実施による町名変更の際、新町名に外神田という名が採用された。面積は408,300㎡で、千代田区内の約3.5%を占める。世帯数は1,887。人口総数は3,458。平成17年国勢調査による昼間人口は32,664、夜間人口は2,988。昼間夜間人口比率10.9倍(渋谷区は2.7倍。新宿区は2.5倍)外神田町内には、JR秋葉原駅と東京メトロ末広町駅があり、年間乗車人員は合計106,712である。

地名としての秋葉原は台東区であるが、電気街としての秋葉原は千代田区外神田に位置する。明治初期に東京府内に火事が多発し、東京府火災鎮護の神社として秋葉原の地に秋葉神社が創建された。神社の周辺にあった火除のための広大な空き地を「秋葉原(あきはらは)」 「秋葉っ

原(あきばっばら)」と呼んでいたことが名前の由来となっている。振り返ると、この街は時代と共に大きな変遷があった。関東大震災後の1928年(昭和3年)に現在のJR秋葉原駅前に神田市場が移転され、1989年(平成元年)まで、日本一の青果市場として賑わっていた。第二次世界大戦後、秋葉原の闇市で真空管やラジオなどの電気部品が扱われたことが現在の電気街としての礎になっている。1960年代の高度成長期に家電街として発展し、1994年(平成6年)に秋葉原電気街でのパソコン関連売上が家電売を超えた。現在では、ゲーム、まんが、アニメ、アイドルなどのキャラクターコンテンツを販売する小売店が進出している。

ラジオ街から電気街、そしてオタク街と変化してきた秋葉原。古くから縁結びの神様として親しまれ、今再びパワースポットとして注目を浴びている神田明神。どちらも同じ外神田にある。これから時代と共に外神田がどのように変わっていくのか。この街に通う僕はその変化を楽しみにしている。



03 アキバリサーチ・レポート

text by 番場文章

僕がオタクと聞いて思い浮かべるイメージ。色褪せたネルシャツ・丈の短い水色のGパン・機能性抜群のリュック・歩きやすさ重視の運動靴・そしてトレードマークである眼鏡。でもいかにアキバ系なファッションのオタク、本当に今もいるのだろうか？ そんな問いから、今回のアキバのリサーチは始まった。

6月19日12時。休日の秋葉原を歩いてみることにする。スタート地点は秋葉原駅電気街口。さっそくガンダムカフェの行列が目飛びこんできた。1時間くらい待つらしい。続いて電気街を末広町方面に向かって歩いてみるが、どんなに歩いてみても、いかに「アキバ系」という人物が見当たらない。ドン・キホーテ前にておかつぱ頭・真っ赤なエナメルバッグ・黒い針金眼鏡の男性に声をかけてみる。彼が言うには、最近のオタクは無難なファッションをしていることが多いらしい。そんな彼のファッションも上下白と黒のモノトーン。いわゆるアキバ系ファッションは、この街でもいまや異質なものになっているようだ。秋葉原でおしゃれは全く機能しないと思っていたのに、オタクは

異性にモテたい、かっこいいと思われたいといった考えがないはずだから服の優先度が極めて低いはずだ、と。しかし、一応嫌悪感を抱かせない程度の気遣いはしているようだし、多少は人の目を気にしているということか。

帰り道、駅の近くで、緑のベレー帽をかぶったボーイスクウトの少年を見かけた。彼は本物なのか、それともコスプレなのか。はっきりせずに混乱した。

6月24日23時。ワールドカップの日本対デンマーク戦の日にも関わらず、新作のゲームを買うため、徹夜組の行列ができていた。秋葉原では毎日どこかで行列ができていた。その様子から彼らのパワーを感じ、これから何か起こりそうなのという予感がしてしまう。やっぱりアキバはただのオタク街として片付けられる場所ではない。

オタクたちのエネルギーには、独特の強さがあった。その点はこれからも変わらないだろう。だけど、彼らも時代と共にちょっとずつ変わっていく。ファッションの次は、一体何が変わるのか。僕はそれを観察するために、これからもアキバを歩き続けたい。



04 外神田フィールドノート

text by 後藤繁雄

先日『BRUTUS』の「東東京特集号」があって、僕は佐藤直樹さんや伊藤ガビンさんと座談会をした。その時にも言ったのだが、僕が東京に来てもう30年以上になるけれど、ずっと渋谷区・港区あたりに住み、仕事もその周辺でやってきていて、全く「東東京」に移るなんて考えなかった。今も自分がディレクターを務めているG/P galleryは、恵比寿のNADiffを拠点にして「現代写真」を広げたいと思っている。しかし、元鎌成中学の3331に、編集とギャラリーのニューモデルg3/(トリプルジー)をつくって以来というもの、「場所と編集」あるいは「都市と編集」というものを朝から晩まで考えている。ツイッターだって「いま・ここ」の編集ツールであり、生きていることの編集がやっぱり面白いのだ。

アキバ/外神田に出勤するために日々歩いていると、このエリアが急に興味深い場所だとわかってきた。確かにアキバの裏で上野の手前の「ボーダーエリア」なのだが、それ故に可能性があると思う。3331を起点に、アキバを徘徊したり、湯島をうろつく。そうすると「こんなものが

あったらもっと面白くなる」というイメージが湧き上がるのだ。同じようにスーパースクールに通ってる生徒の中には、「今度は外神田に住んでみようかと考えてるんです」というやつが、僕が知ってるだけではやくも3人出てきた。3331のまわりには今、空テナントもたくさんあって、このあいだ僕は破格の賃料の一棟ビルを見つけたりもした。アートビレッジ、コミュニティ。日々のフィールドワークをしているうちに、そんな素敵な「妄想」が湧いて出る。最近よく、「タウンマネジメント」という言葉が使われるようになった。たいていは大手のデベロッパーが、その「エリア」の魅力をUPし、地価を高めるためにやる。

それをもっとインディペンデントレベルでもできるのか興味があるのだ。「街の魅力」って面白いテーマだ。

これからスーパースクールでは「都市と編集」アプリに基づくワークショップもスタートさせるが、一番それを使って楽しもうとしているのは、実は僕自身なのかもしれない。



05 3331 Arts Chiyoda についてのアンケート

text by 橋本美和子

秋葉原や外神田は不思議なオーラや魅力をはらんだ街だ。その中に、6月26日グランドオープンしたのが3331。地域にとってどんな存在なんだろうか？ 地域の人たちに受け入れてもらっているのだろうか？ そんな疑問が浮かんだので、3331の周辺でアンケートを取ってみることにした。

「家が近所なので、子供たちを遊ばせに来ているんです。オープニング展は見ましたよ。」「通りすがりで入ってきたのですが…。3331ってなんですか？」というのはいは3331の校庭にあたる、練成公園にいた方々のコメント。平日の西日が傾きはじめた時間、公園のメンバーは…近所の子供たち／そのママたち／フリスビーで遊ぶ犬とそのご主人／買い物途中で休みに来たらしいオタク風青年／カップル／煙草を吸いにきた近所の会社の人など。ごく普通の公園として利用しているみたいだ。中学校を改修して作られただけあって、地域になじみづらいような立地や雰囲気では決してない。だけど認知度は、今のところあまり高くないようだった。

さらに外へ足を伸ばしてみる。「3331？ 知らないです」3331から100mほどの地点で冷たい反応が返ってくる。アートに興味がなく、たまたま通りがかった人ならば知らなくても当然なのかな…。街中では知らない人がほとんどだった。近くで働いている方は「あるのは知っているけど…」といった感じで、行ったことはないという。

アンケート調査で発見したのは、『当然だけど、アートに興味ある人ばかりじゃない。』日ごろ展覧会などはほとんど行かない、という人が多数だった。だから認知度は高くない。でも、公園は必要だし、近所だとやっぱり何か気になる。面白いことがやっているなら入ってみたい、とは思っているみたいだ。「ここって入っていいんですか？」と、入り口の目の前の階段で休んでいたおじさんの言葉が突き刺さる。何かのきっかけが必要に違いない。

時々寄る、近くの焼き鳥屋さん。今度行った時こう言ってみようかなあ。「3331ってアートを知らない人でも楽しめますよ」って。



06 アキバの歩行者天国

text by 増田祐加

「アキバの歩行者天国、本当に再開できそうなの？」

秋葉原に何の思い入れもない非オタクの私が、歩行者天国再開に関する話題に興味を持っているのは、あの光景を見てしまったからだと思う。

東京に住んでいても東京のこと意外と知らないよねってことで、行ったことないし行こうとも思わないアキバにあえて行って見たのが2年前。その日がたまたまホコ天の日で、ものすごくたくさんの人がいた。でもそこには私のような普通の女子大生の姿はなかった。

涼宮ハルヒの制服を着た女の子が、あのお決まりのポーズで写真を撮られている。やけにスカートが短いからか、周りには人ばかり。そのほとんどは妙なファッションのオタク達で、寒い冬なのにうっすらと汗をかいている。みんな一眼レフのカメラを持って撮影に必死。そこはオタクが日常から解放された空間って感じで、みんな楽しそうだった。私は彼らのエネルギーに圧倒される。こんな世界があるんだ…。

でもこれって、ディズニーランドでミッキーを見て喜ぶ私ともしかしたら同じなのかも。そう考えると、それまで異世界の人間でしかなかったオタクを理解できる。

それからあの事件が起きてホコ天は中止になって、久しぶりにアキバに行ったら、あんなにいっぱいいたオタクたちがいなくなっていた。なんだか静かで、寂しかった。だから私は歩行者天国再開に賛成派。アキバの街には、彼らのエネルギーが必要なのだと思う。

オタク達はどこに行ったのだろう。あのエネルギーを今はどうやって発散させているのか。ちゃんと人生を楽しんでいるのだろうか。全然関係ない人たちのことなのに心配になる。それはあんなに楽しそうな彼らの顔を見てしまったからだろう。私はホコ天が再開されたら絶対に見に行く。あの場所の独特のエネルギーを感じたい。誰でも一度はあの光景を見た方がいいと思う。ディズニーランドとはちょっと違う、非日常的空間を楽しめるはずだ。

